

水の動きに着目した水景施設の評価構造に関する研究

正会員 ○今井まみ*
正会員 合掌 顕**水景 評価構造 評価グリッド法
好ましき

1. 背景と目的

日本で最初の水景施設は、1973年に東京都江戸川区に作られた古川親水公園であった。小瀬・紀谷¹⁾によるとこの頃からオープンスペースとしての水空間の役割や都市景観が見直され、人工的な水関連施設においても心理的な快適性や水遊びを考慮した親水機能が注目されるようになったとされている。現在では、地方公共団体等によって「緑がある」「動きがある」「水と触れ合える」等、より良い水景施設計画のためのガイドラインが作成されているが、これらの水景施設は利用者にとどのように評価されているのだろうか。また近年水景施設は形態が多様化していることから、施設計画のガイドラインも形態に応じて異なるのではないだろうか。

水景を対象とした印象評価に関する研究では、河川景観のスライド写真を用いた評価尺度による被験者実験²⁾や、水景施設の形態別に見た現場実験によるアンケート調査³⁾等が行われているが、インタビュー調査による評価構造の検討はなされていない。

そこで本研究では、水景施設の形態として水の動きに着目し、利用者水景施設に対する具体的な評価項目を把握すると共に、水の動きが多い水景と少ない水景について「好ましき」の評価構造の違いを検討することを目的とした。

2. 方法

讀井・乾³⁾による評価グリッド法を用いたインタビュー調査を行った。エレメントとして用いる水景施設の写真を「水の動き」によって2組に分類した。動きの大きな噴水や落水の激しい滝などを持った施設を「動きのある水景施設(以下〈動〉)」、池や川のように地面を流れる形態や、水の動きが穏やかな噴水を「動きの少ない水景施設(以下〈静〉)」とした(図1)。

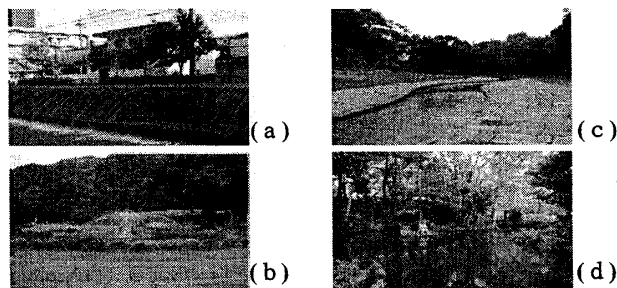


図1 刺激写真の例【〈動〉:(a)(b), 〈静〉:(c)(d)】

調査は水景施設の写真(動)と(静)各21枚を用いて学生20名に対して行った。まず「好ましき」によって各写真を5段階に分類してもらい、その後「好ましい」と判断した理由について質問をし、そこで得られた項目に関連する評価項目をラダーリングにより抽出して、ネットワーク図を作成した。

3. 結果と考察

面接調査によって得られた評価項目について類似しているものを集約し、水景施設が「好ましい」「好ましくない」理由として多く言及された項目を、表1,2にまとめた。

表1 「好ましい」理由の指摘数が多かった項目

〈動〉の評価項目		〈静〉の評価項目	
緑がある	25	緑がある	25
自然な	22	落ち着く、安らぐ、癒される	17
像やモニュメント	14	自然な	15
落ち着く、安らぐ、癒される	14	調和している	12
噴水のデザイン	12	きれいな	11
水の動き	11	整備されている	10
きれいな	11	掃除、管理が行き届いてい	10
水しぶき	10	像やモニュメント	10
調和している	9	ベンチや休憩所がある	10
景色、見た目が良い	8	水の流れ	8
楽しい、面白い	8	水がきれいな	7
水の量が多い	7	石、岩	7
目がいく	7	滞在しやすい	7
石、岩	6	造った意図が伝わる	6
落水	5	水の量が多い	5
水の流れ	5	広い	5
大きい	5	楽しい、面白い	5
		周りの環境が良い	5

表2 「好ましくない」理由の指摘数が多かった項目

〈動〉の評価項目		〈静〉の評価項目	
施設の必要を感じられない	13	施設の必要を感じられない	16
汚いな	11	水がない	13
掃除、管理がされていない	11	汚いな	11
暗いな	9	掃除、管理がされていない	10
水が汚いな	8	調和していない	8
寂しい	7	草が生えている	7
噴水のデザイン	6	整備されていない	6
自転車が置いてある	6	周りの環境	6
調和していない	6	暗いな	5
水に勢いがいない	5	滞在しにくい	5
草が生えている	5		
水の部分が見えにくい	5		
周りの環境	5		

A study about the structure of evaluation for the waterscapes paying attention to a flow of the water

*IMAI Mami
**GASSHO Akira

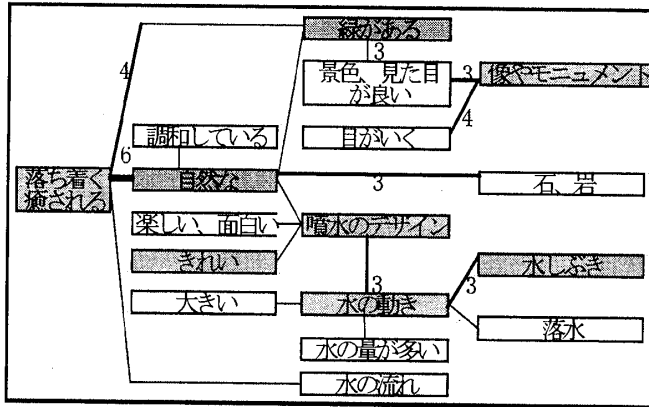


図3 (動)の好ましい理由についての全体のネットワーク図

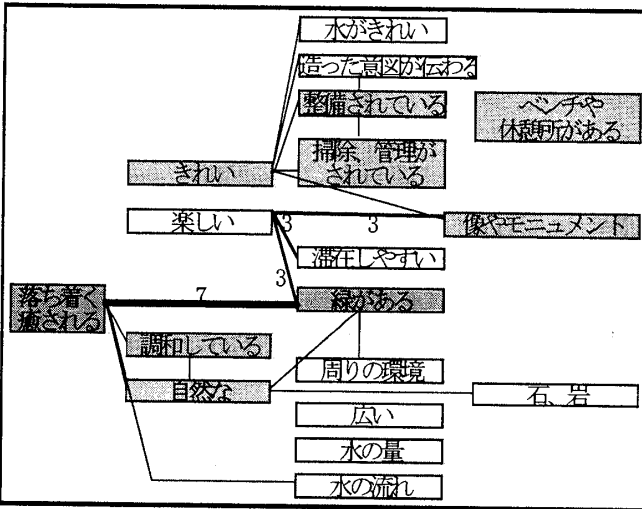


図4 (静)の好ましい理由についての全体のネットワーク図

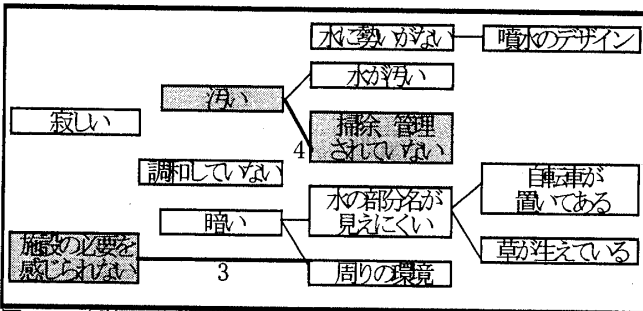


図5 (動)の好ましくない理由についての全体のネットワーク図

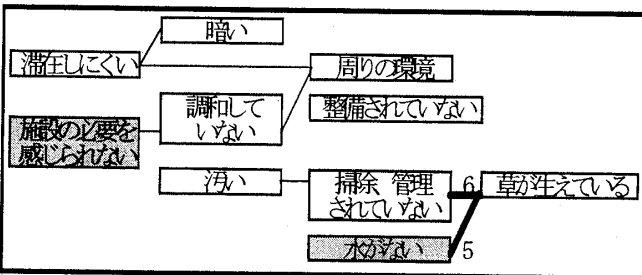


図6 (静)の好ましくない理由についての全体のネットワーク図

次に、(動)と(静)の「好ましい理由」と「好ましくない理由」それぞれについて回答者全体のネットワーク図(図3~6)を作成した。これらの結果 (動)と(静)に共通して「緑が多い」ことが施設の好ましさに関わっていること、(動)において「水の動き」が、(静)において「掃除・管理がされている」「ベンチや休憩所がある」ことが「好ましき」の評価に関わっていることが明らかになった。さらに(動)と(静)に共通して「落ち着く、癒される」ことが好ましきにつながる項目として挙げられていた。

また(動)(静)それぞれについて、言及された全項目から①水に関する項目、②滞在スペースに関する項目、③設備などに関する項目、④緑に関する項目といったカテゴリーに分類し、(動)(静)と指摘数のクロス表を作成して χ^2 検定を行った。その結果、①に関して1%で(動)の指摘率が有意に高く、また②と③に関しては5%で(静)の指摘率が有意に高かった。これより、これらの項目では水の動きによって利用者の注目する点異なることが明らかになった。④に関しては有意な差は見られなかったが、ネットワーク図のつながりから、(動)と(静)どちらの水景施設においても好ましきにかかわる要因として重要視されていると考えられる。

4. まとめ

本研究では水景施設の写真を用いて評価グリッド法によるインタビュー調査を行い、水景施設の「好ましき」に関連する評価項目を抽出し、(動)と(静)の水景施設の評価構造を比較した。その結果、(動)と(静)のどちらの水景施設においても「落ち着く、癒される」ことが求められるが、水景の持つ水の動きにより、「落ち着く、癒される」と判断するための具体的な要素が異なることが明らかとなった。

「緑が多い」ことが(動)と(静)の施設に共通して求められていることから、水景施設のガイドラインにおける指摘は妥当であったと考えられる。一方、「水の動き」については(動)の施設計画においては特に重要視されるが、「水の動きが少ない」水景ではそれ以外の要因、例えば滞在スペースの設置や設備の充実によってより魅力的な水景計画が可能であると考えられる。

参考文献

- 1) 小瀬博之, 紀谷文樹「水景施設における人の行動の解析に対する画像処理の適用」日本建築学会計画系論文集 No.481 pp.75-81, 1996.3
- 2) 村川三郎, 西名大作, 植木雅浩, 横田幹朗「河川景観の画像特徴量と被験者の心理的評価構造の関連」日本建築学会計画系論文集 No.524 pp.53-60, 1999.10
- 3) 二宮敦, 畔柳昭雄, 磯部久貴, 渡辺英俊「現場実験による水景施設の快適性評価に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.475-476, 1998.9
- 4) 讚井純一郎, 乾正雄「レポートリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出」日本建築学会計画系論文集 No.367 pp.15-21 1986.9

*岐阜大学大学院地域科学研究科・修士課程

**岐阜大学地域科学部 准教授

*Graduate School of Faculty of Regional, Gifu Univ.

**Faculty of Regional Studies, Gifu Univ., Ph.D